

和歌山県立医科大学附属病院



薬剤部 概要



**私達は安全で質の高い医療を提供し、
地域の保健医療の向上に貢献します**



目次

| | |
|-----------------|----|
| ご挨拶 | 1 |
| 概要 | 2 |
| 沿革 | 3 |
| 薬剤部年表 | 3 |
| 歴代薬剤部長 | 3 |
| 薬剤部初期の様子 | 4 |
| 理念・方針 | 5 |
| スタッフ | 6 |
| 組織図 | 7 |
| 業務内容 | 8 |
| 調剤業務 | 8 |
| 対物業務から対人業務へ | 9 |
| 無菌調製業務 | 9 |
| 院内製剤業務 | 10 |
| 麻薬管理業務 | 10 |
| 医薬品管理業務 | 10 |
| 医薬品情報管理業務 | 11 |
| 医薬品情報管理室の業務 | 11 |
| 病棟薬剤業務 | 12 |
| 領域別チーム医療 | 13 |
| TDM業務 | 13 |
| 手術室薬剤師業務 | 14 |
| PBPM | 14 |
| 外来薬物療法センター業務 | 15 |
| 入院前常用薬確認業務 | 15 |
| 教育 | 16 |
| 教育・研修 | 16 |
| 薬学部生の病院実務実習 | 16 |
| 研究 | 17 |
| 研究活動 | 17 |
| 主な業績 | 17 |
| 紀北分院 | 18 |
| 関連部署 | 19 |
| 臨床研究センター 治験管理部門 | 19 |
| 医療安全推進部 | 19 |
| 感染制御部 | 19 |
| メッセージ | 20 |
| 職員募集 | 21 |
| アクセス | 22 |
| 病院マップ | 23 |



For the Patients

患者さんに安心と安全を与えられる薬剤師を目指して

本院の理念に、「私達は安全で質の高い医療を提供し、地域の保健医療の向上に貢献します」とある通り、薬物治療を受ける患者さんの安全を確保することは、薬剤部の第一の使命であると考えています。患者さんが安心して質の高い安全な医療を受けられるよう、あらゆる事態を想定しながら医薬品等の適正使用に努めています。また、当院は和歌山県の基幹病院として地域医療に貢献することが求められており、特に少子高齢化や人口減少が加速度的に進むこの和歌山という地における今後の医療を、薬という観点から支えていけるよう様々な取り組みを行っていきたいと考えています。

当院は県内で唯一「特定機能病院」の承認を受けた大学病院であり、その使命として、高度な先端医療の提供（診療）、優秀で使命感に満ちた医療人の育成（教育）、高度医療技術の開発・評価（研究）、という3つの大きな役割を担っています。薬剤部においても、薬剤師としての使命に^{たぎ}滾り、先進的な薬物療法を提供できる優れた薬剤師を育成するとともに、診療科や本学医学部・薬学部などと協働しつつ、薬剤師による先駆的な研究活動を推進できるよう力を注いでいきたいと考えています。

当院の薬剤部は、薬剤部長1名、副薬剤部長3名、薬剤師40数名に加え、業務補佐員10数名など総勢約60名からなる大所帯の部門になります。調剤部門、注射部門、製剤部門、医薬品情報部門などのセントラル業務に加え、病棟部門、化学療法部門など様々な部門に分かれ、調剤室だけでなく、全病棟はじめ病院内の多くの部署に薬剤師が赴き、医師、看護師など他の医療スタッフと協働しながら薬剤の管理等を行っています。皆がそれぞれ真摯に薬剤業務に取り組んでおり、その貢献から他の医療スタッフからも一目置かれる存在になりつつあります。

皆が生き生きと業務に取り組み、薬剤師としての使命を全うしながら、自身のライフワークバランスも大切にしており、とても居心地の良い職場環境になっているように思います。この薬剤部概要をご覧の皆様とまたお会いできる日を楽しみにしています。

和歌山県立医科大学附属病院薬剤部
教授・薬剤部長 中川 貴之



概要

病院概要

| | 本院（紀三井寺） | 紀北分院（かつらぎ町） |
|----------|----------------------------------------------------------------------|-----------------------------|
| 病床数 | 800床（一般 760床、精神 40床） | 104床（一般 100床） |
| 診療科数 | 26 | 7 |
| 病床稼働率 | 84.2% | 33.1% |
| 平均在院日数 | 12.9日 | 10.9日 |
| 外来患者数 | 1,037人/日 | 246.8人/日 |
| 院外処方箋発行率 | 96.2% | |
| 職員数 | 1,919人（医師 450人、看護師 730人、薬剤師 58人） | 143人（医師 22人、看護師 69人、薬剤師 4人） |
| 各種指定 | 特定機能病院、がん診療連携拠点病院、肝疾患診療連携拠点病院、和歌山県アレルギー疾患医療拠点病院、基幹災害拠点病院、がんゲノム医療連携病院 | |

令和4年度実績より

薬剤部概要

| | 本院（紀三井寺） | 紀北分院（かつらぎ町） | | |
|-------------------------|-------------------------------------|------------------------------------------------------------------|-------|------|
| 職員数 | 教授・薬剤部長 | 1名 | 薬局長 | 1名 |
| | 副薬剤部長 | 3名 | | |
| | 常勤薬剤師 | 43名 | 常勤薬剤師 | 3名 |
| | 非常勤薬剤師 | 2名 | | |
| | 業務補佐員 | 16名 | | |
| 業務指標 | 病棟薬剤業務実施加算 1 | 届出済 | 届出済 | |
| | 病棟薬剤業務実施加算 2 | 届出済 | | — |
| | 薬剤管理指導料算定件数 | 16,487件 | | 862件 |
| | 抗がん薬無菌調整 | 15,288件 | | 0件 |
| | 高カロリー輸液無菌調整 | 3,719件 | | 0件 |
| | 実務実習生受入人数 | 9人 | | — |
| 専門・認定薬剤師の研修施設認定（2023.4） | 日本医療薬学会 | 医療薬学専門薬剤師研修施設 がん専門薬剤師研修施設 薬物療法専門薬剤師研修施設 地域薬学ケア専門薬剤師研修施設 | | |
| | 日本病院薬剤師会 日本臨床腫瘍薬学会 日本臨床栄養代謝学会 | がん薬物療法認定薬剤師研修施設 がん診療病院連携研修病院 NST専門療法士認定教育施設 | | |

令和4年度実績より

薬剤部年表

| | |
|----------|---------------------------------------|
| 昭和23年 | 医学専門学校附属医院薬局も医科大学附属医院薬局となった |
| 昭和24年8月 | 附属医院薬局から附属病院薬局に名称変更 |
| 昭和25年4月 | 身分が文部技官から和歌山県技術吏員に変わる |
| 昭和35年 | 改築し、薬局も移転（投薬待合室の所） |
| 昭和51年 | 改築拡張移転 |
| 平成4年 | 服薬指導開始 |
| 平成8年9月 | 薬剤管理指導承認施設となる |
| 平成11年5月 | 紀三井寺811の1へ新築移転、「薬剤部」に名称変更 |
| 平成12年4月 | 当直、宿直が二人体制に。処方オーダリングシステム、調剤支援システム導入 |
| 平成13年4月 | 組織変更し、係長制を導入、4係を置く（調剤1係、調剤2係、製剤係、薬務係） |
| 平成14年1月 | 指導係を設置し、5係制になる |
| 平成16年4月 | 全面院外処方箋発行になる |
| 平成17年3月 | 抗MRSA薬のTDMを開始 |
| 平成19年4月 | 注射薬自動払い出し機稼働 |
| 平成19年10月 | 組織変更し、副部長、統括主任体制となる。病院長が薬剤部長を兼務 |
| 平成22年5月 | 外来化学療法センター開設に伴い、薬剤師2名派遣 |
| 平成23年3月 | 電子カルテ導入 |
| 平成26年4月 | 中央手術部に薬剤師を常駐させる |
| 平成29年7月 | 薬剤部長が病院長兼務から薬剤師になる |
| 平成29年8月 | 全病棟に薬剤師を配置 |
| 平成30年12月 | 入院前持参薬確認業務開始 |
| 平成31年4月 | 入院センター設置に伴い入院前お薬確認窓口を開設 |
| 令和2年11月 | PBPMによる医師から薬剤師へのタスクシフト/シェアの取り組みを開始 |
| 令和3年4月 | 組織変更し、副部長3名体制となり、係制から部門制に変更 |
| 令和4年3月 | 各部門にリーダーを置く、薬剤部ホームページ開設 |
| 令和5年4月 | 注射自動払い出し機を更新し2台に増設、ピッキングサポートシステム導入 |
| | ピッキングサポートシステムによる非薬剤師の処方薬の取り揃えを開始 |

歴代薬剤部長

| | | |
|----------|-------|-------------------|
| 木村 龍一 | | 昭和23年当時 |
| 堀 太 | 初代薬局長 | 昭和26年 ～ 昭和44年5月 |
| | | 昭和44年6月 ～ 昭和47年5月 |
| 岡本 樹作 | 薬局長 | 昭和47年4月 ～ 昭和51年5月 |
| 山崎 芳隆 | 薬局長 | 昭和51年6月 ～ 昭和52年5月 |
| 畑田 昭雄 | 薬局長 | 昭和52年6月 ～ 昭和61年3月 |
| (北島 淳二郎) | 薬局長代理 | 昭和61年4月 ～ 昭和62年3月 |
| 北島 淳二郎 | 薬局長 | 昭和62年4月 ～ 平成6年3月 |

(次頁に続く)

歴代薬剤部長（前項からの続き）

| | | |
|---------------|-----------------|-----------------|
| 玉置 修身 | 薬局長 | 平成6年4月～平成6年12月 |
| 林 成美 | 薬局長 | 平成7年1月～平成11年3月 |
| 高梨 寛司 | 薬剤部長 | 平成11年4月～平成14年3月 |
| 稲垣 重夫 | 薬剤部長 | 平成14年4月～平成17年3月 |
| 中西 則夫 | 薬剤部長 | 平成17年4月～平成19年3月 |
| 板倉 徹 / 崎山 明宏 | 薬剤部長（病院長） / 副部長 | 平成19年4月～平成20年3月 |
| 畑埜 義雄 / 崎山 明宏 | 薬剤部長（病院長） / 副部長 | 平成20年4月～平成22年3月 |
| 岡村 吉隆 / 崎山 明宏 | 薬剤部長（病院長） / 副部長 | 平成22年4月～平成24年3月 |
| 岡村 吉隆 / 天野 賀弘 | 薬剤部長（病院長） / 副部長 | 平成24年4月～平成26年3月 |
| 天野 賀弘 | 薬剤部長 | 平成26年4月～平成27年3月 |
| 岩城 久弥 | 薬剤部長 | 平成27年4月～令和2年3月 |
| 松原 和夫 | 薬剤部長 | 令和2年4月～令和5年6月 |
| 中川 貴之 | 薬剤部長 | 令和5年7月～ |

薬剤部初期の様子（西睦子先生（昭和20.3～56.3）の覚書から）

昭和20年3月

和歌山市立市民病院薬局が昭和24年から和歌山県立医学専門学校附属病院薬局となる。当時の医専病院は現市役所の東北の角地にあった。

薬局員は、薬局長代理、男子薬剤師3名、女子薬剤師1名、看護婦4名、看護婦生徒1名の計9名で発足した。病院薬局業務は、外来調剤、入院調剤、製剤、注射薬製剤であった。

日増しに戦火が激しくなり、医薬品は第五薬局方の薬品のみで、それも不足がちとなり、注射薬はほとんど院内製剤で、リンゲル注、生理食塩注、ブドウ糖注、プロカイン注の各500ml、アンプル剤は5%、10%、20%、40%、50%のブドウ糖各20ml。他に塩酸エフェドリン、アトロピン、塩酸モルヒネ（当時は麻薬でなく劇薬）等の注射薬を調剤していた。現在では考えられないことである。

その後、和歌山への空襲も激しくなり、勤務後、空襲警報が発令されるごとに、夜の出勤もしばしば、そうこうしているうちに、男子薬剤師が次々と召集入隊、遂に女子薬剤師1名となり薬局業務を一手に引き受ける。幸いにして薬局長代理が入隊不合格となり1カ月足らずで帰還。その後女子薬剤師1名増員され3名となる。

昭和20年7月9日

夜敵機来襲、焼夷弾の雨あられによる空襲で、旧市内のほとんどが焼け野が原となり病院も焼失、入院患者多数と看護婦も死亡し、一夜明ければ地獄絵の如く、有機物の焼けただれた悪臭が漂う、焼死者、負傷者の山また山でしたから、元医学専門学校の校舎（美園町の市立和歌山高女）が幸いに戦火から免れましたので、早速仮病院として、教室にむしろを敷き病室とし、多数の負傷者を収容、治療が始まる。薬局も一教室を使用する。

火傷患者が殆どで、化膿性疾患または破傷風を併発している患者が多く、血清や抗生物質もなく薬品は皆無でしたから、市外の薬品会社から、とりあえずアルコール、ヨードチンキ、リバノール、亜鉛華、肝油、黄色ワセリン、硼酸末、重曹、ジアスターゼ、アスピリンなど少数薬品を緊急購入、火傷患者のために機械器具とてなかったから農家で篩をもらい硼酸末を篩過して、硝子板の上で硼酸軟膏や肝油軟膏を手で練り合わせて患者に塗布する状態であったが、痛みのために呻き破傷風血清がないために死に至る患者などで悲惨な状況であった。また、投薬瓶などは病院の焼け跡から形のくずれていないものを掘り集め熱湯で消毒し使用した。

昭和20年8月15日

終戦となり、薬品は旧軍隊や米進駐軍よりの払い下げや県外からも購入して必要最小限を揃え、外来診療も開始された。但し、各診療科も機械などなく野戦病院のような状態であった。

その後、建物が幸いに中心地で焼け残った旧高島屋（旧医大病院東南の角）を改築、但し、設備不十分にて板で各診療室を区切り、薬局も残った高島屋の陳列棚を分台として使用し、本格的な診療開始される。

後に、ジェーン台風で大ガラス窓が破れて、医薬品が水浸しになるハプニングがあった。

和歌山県立医科大学附属病院の理念

私達は安全で質の高い医療を提供し、地域の保健医療の向上に貢献します。

和歌山県立医科大学附属病院の基本方針

1. 患者さんとの信頼関係を大切にし、十分な説明と理解に基づく同意を得て、安全な医療を行います。
2. 高度で先進的な医療の研究をすすめ、その成果を反映した医療を行います。
3. 豊かな人間性と優れた専門技術を持った医療人を育成します。
4. 和歌山県の基幹病院として、地域の保健医療に貢献します。

薬剤部の目標・方針

For the Patients 患者さんに安心と安全を与えられる薬剤師を目指して

1. 医療の質の向上への貢献
薬の専門職として薬物療法の提供に責任をもち、チーム医療の一員として患者に寄り添い、最適な薬物療法を提供することにより、医療の質の向上に資するための業務展開を図る。
2. 医療安全対策の推進
安心・安全で質の高い医療提供のため、医薬品の適正使用の実践と医療安全の更なる推進を図る。
3. 医療連携の推進
医療機能の分化・地域完結医療への移行により、今後様々な連携が不可欠である。特にかかりつけ薬剤師・薬局との連携は重要であり、その推進および具体化を図る。
4. タスクシフト/シェアの推進
薬剤師に求められているタスクシフト/シェアを含めた多様な業務を推進する。
5. キャリア形成の推進
生涯研修制度、認定・専門薬剤師の取得を推奨し、個々の薬剤師のキャリア形成を推進する。
6. 薬剤師養成のための薬学教育への協力
和歌山県立医科大学薬学部および他の薬系大学と協力し、資質の高い後進の育成を図る。

スタッフ



スタッフ

| | |
|----------|------------------|
| 薬剤部長 | 中川 貴之（薬学部・教授） |
| 副薬剤部長 | 吉田 薫、西川 浩子、杉本 由起 |
| 参与 | 松原 和夫 |
| 常勤薬剤師 | 43名（産休育休含む） |
| 非常勤薬剤師 | 2名 |
| 薬剤部業務補佐員 | 16名 |

（2024.1.1時点）

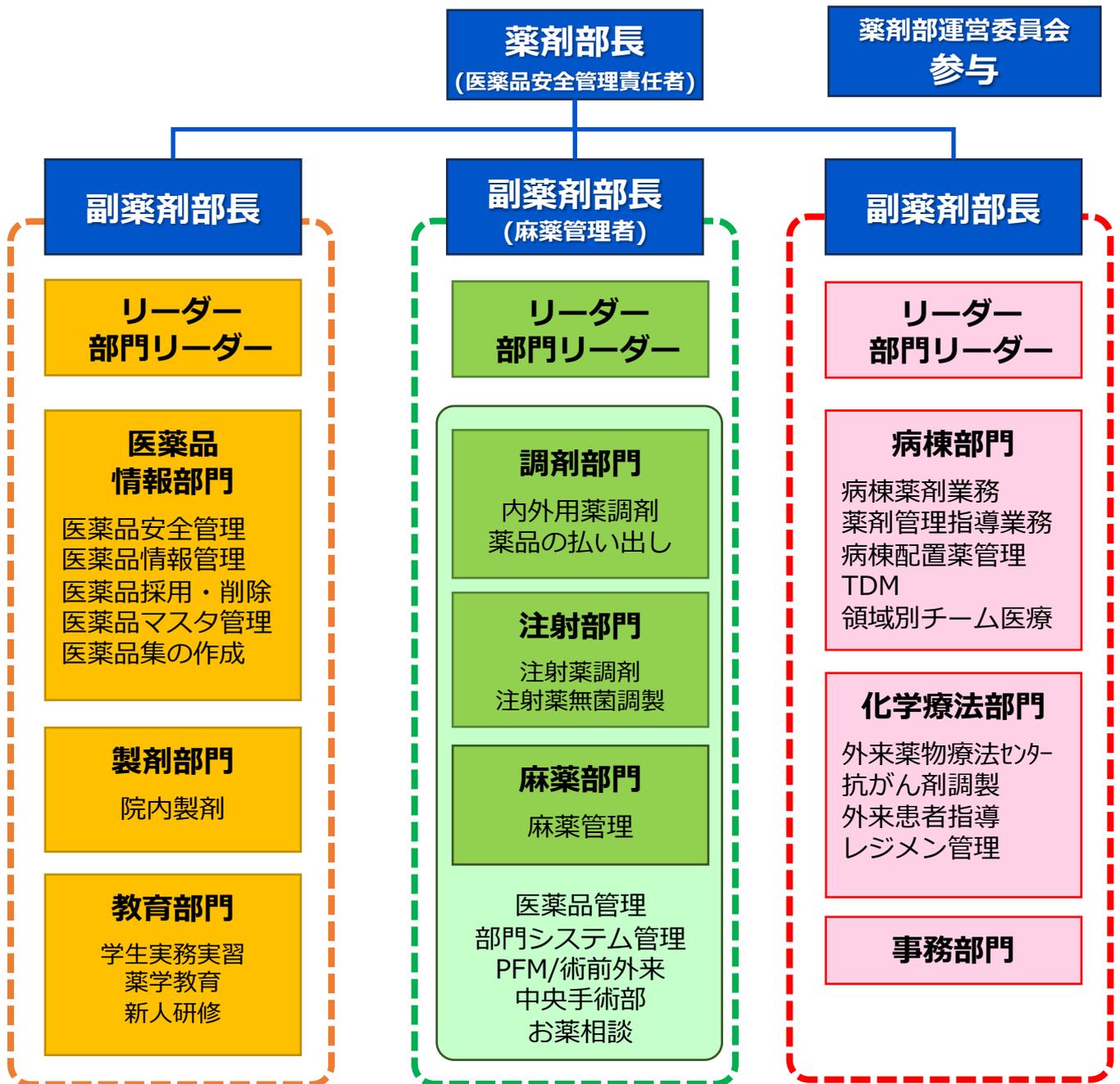
専門・認定薬剤師等の取得状況

| | | |
|-------------|-------------|-----|
| 日本医療薬学会 | 医療薬学指導薬剤師 | 1名 |
| | 医療薬学専門薬剤師 | 1名 |
| | がん専門薬剤師 | 1名 |
| 日本病院薬剤師会 | 病院薬学認定薬剤師 | 14名 |
| | がん薬物療法認定薬剤師 | 2名 |
| | 感染制御認定薬剤師 | 1名 |
| | 認定指導薬剤師 | 1名 |
| 日本臨床栄養代謝学会 | NST専門療法士 | 5名 |
| 日本緩和医療薬学会 | 緩和薬物療法認定薬剤師 | 1名 |
| 日本薬剤師研修センター | 認定実務実習指導薬剤師 | 13名 |
| 日本糖尿病学会 | 糖尿病療養指導士 | 1名 |
| その他 | スポーツファーマシスト | 3名 |

組織図

薬剤部内の組織図

薬剤部は、薬剤部長 1 名のもと、3 名の副薬剤部長が、それぞれ調剤部門、注射部門、製剤部門、病棟部門、化学療法部門等の各部門などからなる 3 つのグループを統括しています。また、それぞれのグループにはリーダー、それぞれの部門には部門リーダーが置かれています。



領域別チーム活動

- ・ 感染制御チーム
- ・ 抗菌薬適正使用チーム
- ・ 緩和ケアチーム
- ・ 高齢者・認知症ケアサポートチーム
- ・ 糖尿病教室
- ・ 術後疼痛管理チーム
- ・ 栄養サポートチーム
- ・ 褥瘡対策チーム
- ・ HIV診療
- ・ DMAT



調剤業務

薬剤師として最も重要な仕事のひとつが調剤業務です。内服薬、外用薬、注射薬の調剤及び監査を行い、患者さんにお薬を提供しています。処方監査に重点を置き、カルテ等の情報から、患者さんに応じた処方であるかを確認します。

業務補佐員を含め、自動注射払出機、自動錠剤分包機、ピッキングサポートシステム等で効率的に取り揃えを行い、薬剤師により最終監査をする流れで行っています。



対物業務から対人業務へ

近年、薬剤師に求められる役割が大きく変化してきました。これまでは、「調剤」や「製剤」といった薬そのものを扱う「対物業務」が主でしたが、今は医師や看護師などととも患者に寄り添いながら、安心・安全な薬物療法を提供する「対人業務」が求められています。そのため薬剤師は、調剤室だけでなく病院内のありとあらゆる場所に赴き、そこで使用される薬を管理しながら最適な薬物療法を届けるよう努めています。

このように薬剤師の活動の場が増え、患者さんのため、安全のため、医師の負担軽減のためにと様々な業務展開を行っていますが、一方で、必要とされる薬剤師の人員や負担も増えてきました。限られた人員のなか安全を確保しながら業務を効率化するため、薬剤部では調剤業務の機械化、自動化を進めています。最近では、注射薬を自動で取り揃えるシステムを導入し、薬剤師の負担が軽減できただけでなく、注射薬取り揃え時の間違いも少なくなりました。また、薬剤師以外の者（業務補佐員）と共同で調剤を行っています。ただし、業務補佐員が調剤する際には、各薬剤に付されているバーコードをハンディターミナルで読みとり、取り間違いが起こらないようにしています。その他様々な業務でも業務補佐員が代行することで人員を確保し、薬剤師が患者さんに寄り添う時間を確保しています。



注射薬自動払出システム



業務補佐員によるハンディターミナルを用いた薬の取り揃え

無菌調製業務

高カロリー輸液とは、経口あるいは経腸での栄養補給が困難な患者さんに栄養源を補給するための輸液のことです。薬剤部では、クリーンベンチを用いて高カロリー輸液を無菌的に調製しています。また、骨髄移植患者等に対しても、無菌的にクリーンベンチで注射剤の調製を行っています。



院内製剤業務

製剤業務は、主に院内製剤を作成しています。市販はされていませんが、治療上必要である薬剤の調製を行うことで、多様な疾患、病態をもつ様々な患者さんへの最適な薬物療法に貢献しています。



麻薬管理業務

医療用麻薬は主に手術における鎮痛やがん性疼痛に対して使用されており、近年のがん患者の増加に伴い、医療用麻薬の必要性が更に高まっています。一方で、医療用麻薬の取り扱いは、「麻薬及び向精神薬取締法」により厳密に規制されています。当院では電子カルテシステムと連動した麻薬管理システムを活用することで、譲受・施用・廃棄等の管理および受払簿の作成を確実にしています。



医薬品管理業務

病院内で使用されている医薬品の購入と供給・在庫管理を一元的に行っています。

病棟・診療科の定数配置医薬品の払い出しや使用期限チェックなど、適切な在庫管理・品質管理を行い、病院内の需要に対して医薬品を迅速に供給しています。特定生物由来製品のロット管理も行っています。

さらに災害拠点病院として、大規模災害発生時の医薬品供給体制を確保するための医薬品を備蓄し、災害派遣医療チーム（DMAT）で使用する医薬品についても在庫管理を行っています。



医薬品情報管理業務

厚生労働省やPMDA（医薬品医療機器総合機構）、各製薬会社から随時提供される治療上有用な情報を収集・整理し、院内の医師、看護師、薬剤師など医療スタッフに向けて、最新の医薬品情報を提供しています。

また、院内のスタッフからの医薬品に関する問い合わせに対し、情報提供を行っています。院内医薬品集の作成や病院内での副作用情報の収集、医薬品のマスタ管理、新規医薬品の採用や後発医薬品への変更に関する検討なども行っています。



医薬品情報管理（DI）室の業務

医薬品情報室では定期的に「Drug Information News」といった医薬品に関するお知らせ文書を作成しています。その中では、医薬品の安全使用に関する最新のトピックスや多職種からの関心が高い内容を取り上げ、わかりやくまとめて発信しています。

また、薬剤師や薬学部の実務実習生にむけ様々な勉強会を企画・開催したり、学会や勉強会の案内や、発表の支援を行ったりと、薬剤師の専門性を高める機会を多々提供しています。当院には各種認定・専門薬剤師資格を持った薬剤師も多数在籍しており、日々研鑽を積んでいます。



Drug Information News



勉強会の様子



病棟薬剤業務

当院では病棟薬剤業務加算1と2を算定しており、集中治療室を含めた全20病棟に薬剤師が常駐し、入院時の持参薬の確認から入院中に開始する医薬品の説明、退院時の服薬指導まで、患者さんに正しく安全に薬を提供するための活動を行っています。

また、薬剤の効果や副作用の有無を確認し、医師に処方提案を行ったり、チーム医療の推進として各科の多職種カンファレンスへの参加、病棟スタッフからの問い合わせへの対応など薬物治療に関して多岐にわたる業務を担っています。



領域別チーム医療

当院では、栄養サポートチーム（NST）、感染制御チーム（ICT）、抗菌薬適正使用支援チーム（AST）、褥瘡対策チーム、緩和ケアチーム、高齢者・認知症ケアサポートチーム（DST）、術後疼痛管理チームなどの様々な活動を行っています。多職種が連携・協働し、それぞれの専門スキルを発揮することで、治療効果やQOLの向上に貢献しています。



薬剤師が所属する医療チーム

| | |
|-----------------------|-----------|
| 感染制御チーム（ICT） | 専任1名、兼任3名 |
| 抗菌薬適正使用支援チーム（AST） | 専任1名 |
| 栄養サポートチーム（NST） | 兼任3名 |
| 褥瘡対策チーム | 兼任3名 |
| 緩和ケアチーム | 専任1名、兼任1名 |
| HIVチーム | 兼任2名 |
| 術後疼痛管理チーム | 兼任1名 |
| 高齢者・認知症ケアサポートチーム（DST） | 兼任2名 |
| 糖尿病教室 | 兼任20名 |

TDM業務

TDMとは、薬物治療モニタリング（therapeutic drug monitoring）の略で、治療効果や副作用に関する様々な因子をモニタリングしながら、患者ごとに個別化した薬物投与を行うことです。血中濃度と治療効果や副作用との間に関係が認められる薬物では、血中濃度を測定し解析した結果と臨床所見から投与計画を行います。当院薬剤部では塩酸バンコマイシン、テイコプラニン、アミカシンなどの抗菌薬を中心にTDMを実施しており、解析結果をもとに医師への投与量提案や医療スタッフとの情報共有を行っています。



手術室薬剤師業務

手術室では、医療用麻薬、毒薬、向精神薬などの法律に基づいた管理が必要な薬品をはじめ、様々な医薬品を取り扱っています。当院では薬剤師が平日日勤帯に常駐し、医薬品管理や医薬品情報提供を通じて麻酔科医、看護師等の医療スタッフと連携し手術が円滑に行えるように支援しています。



PBPM

Protocol-Based Pharmacotherapy Management (PBPM) とは、薬剤師に認められている現行法の業務の中で、医師と合意したプロトコルに従って薬剤師が主体的に実施する業務を行うことを意味します。PBPMの実践により、薬剤師の専門能力に基づく薬物治療の高度化や安全性確保、医師の業務負担軽減などが期待できます。当薬剤部では、現在、以下の9つのプロトコルを実施しており、今後、さらに拡大していく予定です。

抗がん薬投与速度修正プロトコル

支持療法処方支援プロトコル

化学療法レジメン内医薬品の採用変更に伴う処方変更プロトコル

院外処方箋における疑義照会簡素化のプロトコル

院内疑義照会簡素化プロトコル

病棟薬剤師による医師の事前承認を経ずに実施する処方入力・修正に関するプロトコル

病棟薬剤師による内服定期処方および退院時処方における処方提案プロトコル

薬剤師による抗MRSA薬の血中濃度測定オーダープロトコル

精神科病棟における頓服薬の継続処方入力に関するプロトコル

外来薬物療法センター業務

外来薬物療法センターでは、薬剤師が抗がん薬の投与量、投与スケジュール、副作用予防薬などを事前に確認し、処方監査を行っています。投与当日の検査値、投与の可否、投与量の妥当性を確認した上で抗がん薬の調製を行っています。薬剤師2名で医薬品の照合、採取量の確認を行い、適切かつ安全に患者さんに投与されるよう努めています。医療従事者の職業性曝露対策にも取り組んでおり、一部の抗がん薬に対して、閉鎖式薬物移送システムによる抗がん薬の調製、投与も行っています。

また、抗がん薬を投与される患者さんに対して、治療スケジュール、副作用、自宅での注意事項などの薬剤説明や副作用モニタリングを行い、支持療法薬の医師への処方提案、地域薬局との情報共有による外来患者の副作用管理なども行っています。



入院前常用薬確認業務

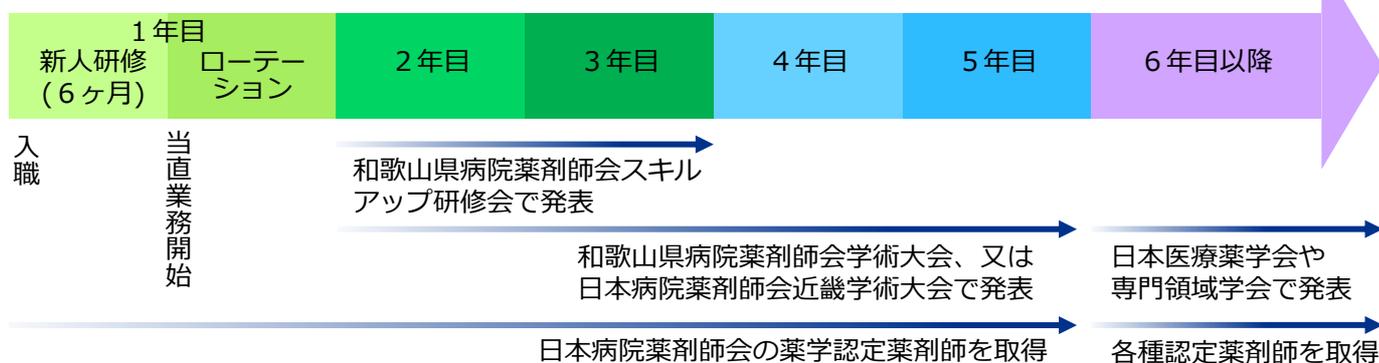
入院前に患者さんから、「お薬手帳」や「お薬説明書」などを用いて使用中の薬剤に関する情報収集をすることで、術前中止薬スクリーニングや副作用歴、アレルギー歴の把握を行っています。患者さんにとって入院後の薬物療法をより有効・安全に提供するよう努めています。



教育・研修

和歌山県立医科大学附属病院では、効果的な新人薬剤師教育を実施するため、調剤業務や病棟業務を含めた基本的な薬剤師スキルを修得するため、約6ヶ月の新人研修を行っています。また、薬剤師の更なるスキルアップを図るため、関連学会や研修会等への参加や各種認定・専門薬剤師の取得を積極的にサポートしています。

研修プログラム



薬学部生の病院実務実習

当院薬剤部では、每期3～5名の薬学部実習生を受け入れています。多くは和歌山市あるいはその近郊の町出身の他大学の学生（例：近畿大学、大阪医科薬科大学、摂南大学、神戸薬科大学、京都薬科大学など）で、いわゆる「ふるさと実習」として、生まれ育った和歌山の地で病院実務実習を受けています。当院での実習は、病棟実習をメインとしており、複数の病棟での実習に加え、各医療チームでの実習も行っています。もちろん、調剤、化学療法、医薬品情報管理、医薬品管理など多くの部署で実習を経験できることが特徴です。

2025年からは、和歌山県立医科大学薬学部の5年生が年間で約50名、当院で実習を受けることとなります。他大学の学生とあわせると1期につき約20名もの実務実習生を受け入れることとなります。近隣の他の病院や紀北分院と協力しながら実習を行うこととなりますが、その受入体制を急ぎ構築している所です。

病院実務実習スケジュール



研究活動

大学病院の使命として、高度な先端医療の提供（診療）、優秀で使命感に満ちた医療人の育成（教育）のほか、高度医療技術の開発・評価（研究）も推進する必要があります。薬剤部においても、診療科や本学医学部・薬学部などとともに、薬剤師による先駆的な研究活動を積極的に推進できるよう力を注いでいきたいと考えています。

主な業績

学会発表

2023年度

1. 江川英毅ら：切除不能膵がんに対するS-IROXの使用状況及び安全性の評価. 第45回日本病院薬剤師会近畿学術大会、2024.1.27-28（和歌山）
2. 亀位耕平ら：がん薬物治療に関わる当院の薬薬連携の現状調査および和歌山県がん薬物療法共通トレーニングレポート作成について. 第45回日本病院薬剤師会近畿学術大会、2024.1.27-28（和歌山）
3. 神谷祐果ら：ニンテダニブ導入クリニカルパスにおける薬剤師の取り組みと副作用発現状況の調査. 第45回日本病院薬剤師会近畿学術大会、2024.1.27-28（和歌山）
4. 河野宏亮ら：術前患者に対する薬剤師による術前中止薬の確認の重要性. 第45回日本病院薬剤師会近畿学術大会、2024.1.27-28（和歌山）
5. 坂口雅弥ら：バンコマイシンの院内TDMマニュアル化によるTDM業務の標準化とその検証. 第45回日本病院薬剤師会近畿学術大会、2024.1.27-28（和歌山）
6. 田淵沙織ら：新規採用医薬品の処方実態調査～採用品目の適正化および期限切れ廃棄ゼロをめざして. 第45回日本病院薬剤師会近畿学術大会、2024.1.27-28（和歌山）
7. 西岡達也ら：院内疑義照会簡素化プロトコル導入後の医師・薬剤師の業務効率化の評価. 第45回日本病院薬剤師会近畿学術大会、2024.1.27-28（和歌山）
8. 西岡英城ら：アミノ酸・糖・電解質・脂肪・水溶性ビタミン液（エネフリード®輸液）の使用実態調査. 第45回日本病院薬剤師会近畿学術大会、2024.1.27-28（和歌山）
9. 吉野恭平ら：術後疼痛管理チームによる術後疼痛、術後嘔気・嘔吐の管理と薬剤師の役割. 第45回日本病院薬剤師会近畿学術大会、2024.1.27-28（和歌山）
10. 山口真衣子ら：調剤室における薬剤師から非薬剤師へのタスクシフトとその効果. 第45回日本病院薬剤師会近畿学術大会、2024.1.27-28（和歌山）
11. 中川貴之：教育セミナー 女性に多い痛みと鎮痛薬の使い方. 看護薬理学カンファレンス2023 in 神戸、2023.12.17（神戸）
12. 喜多えり奈ら：病棟薬剤師による処方入力プロトコルの作成・運用について. 日本医療薬学会年会2023、2023.11.3-5（仙台）
13. 佐野尚平ら：EGFR阻害薬に起因する皮膚障害における多職種連携による早期介入の有用性. 日本医療薬学会年会2023、2023.11.3-5（仙台）
14. 伊藤雄大ら：膵癌患者におけるリポソーマルイリノテカン治療による副作用リスク因子の検討. 日本医療薬学会年会2023、2023.11.3-5（仙台）
15. 川井悠輔：成長ホルモン皮下注製剤の自己注射手技指導の取り組み. 和歌山県病院協会学術大会2023、2023.11.3（和歌山）
16. 狗巻広宣：耳下腺がんに対してドセタキセル・トラスツズマブ療法が著効した一例. 和歌山県病院協会学術大会、2023.11.3（和歌山）
17. 中川貴之：シンポジウム『薬学研究者と薬剤師の協働で深めるがん・緩和薬物療法』薬学研究者と薬剤師の協働によるがん支持療法・緩和ケアのサイエンス. 医療薬学フォーラム2023/第31回クリニカルファーマシーシンポジウム、2023.7.22～23（山形）
18. 中川貴之：シンポジウム『慢性疼痛に対する薬物療法の現状と問題点』慢性疼痛患者におけるポリファーマシーとその対策. 日本ペインクリニック学会 第57回学術集会、2023.7.13～15（佐賀）
19. 佐野尚平ら：EGFR阻害薬に起因する皮膚障害における多職種連携による早期介入の有用性. 和歌山医学会総会2023、2023.7.2（和歌山）

2022年度

1. 川井悠輔：成長ホルモン皮下注製剤の自己注射手技指導の取り組み. 和歌山県病院薬剤師会若手スキルアップ研修会2023、2023.1.21（Web）
2. 狗巻広宣：耳下腺がんに対してドセタキセル・トラスツズマブ療法が著効した一例. 和歌山県病院薬剤師会若手スキルアップ研修会2023、2023.1.21（Web）
3. 山口佳那ら：院外処方箋における疑義照会簡素化プロトコルの報告. 日本病院薬剤師会近畿学術大会2023、2023.2.4-5（Web）
4. 賀来治香ら：注射薬自動払出し装置およびPORIMSの運用構築による返品薬削減の取り組みと薬剤師業務のタスクシフティングに関する検討. 日本病院薬剤師会近畿学術大会2023、2023.2.4-5（Web）
5. 竹内あいら：和歌山県立医科大学附属病院における救急医療への薬剤師の関わりについて. 日本病院薬剤師会近畿学術大会2023、2023.2.4-5（Web）

総説・図書

1. 中川貴之他：緩和医療薬学 改訂第2版（編集 日本緩和医療薬学会）、南江堂（2023）
2. 中川貴之、田上恵太他：「第4章 薬物療法」トータルマネジメントをめざす！がんの痛み治療テキスト（編集 松本禎久、森雅紀、田上恵太）、南江堂（2023）

紀北分院



紀北分院

紀北分院は昭和13年紀北病院の名称で伊都郡かつらぎ町に設立され、昭和30年に和歌山県立医科大学附属病院紀北分院として診療が行われ、現在に至っています。病床数は104床で2種感染症病床を4床有しています。コロナ禍においては1,500人を超える新型コロナウイルス感染症に罹患した患者さんを受け入れ、オール紀北分院のスローガンのもとそれぞれの職種がコロナ診療に携わりました。

紀北分院には4名の薬剤師が在籍しています。少ない人数ですが、調剤、病棟薬剤師業務、DI業務、製剤業務、発注業務等、薬剤師は全ての業務を行うことができます。また、本院と比べると診療科数が少なくコンパクトな病院ですが、その分、職種間の垣根が低く、病棟薬剤師業務では疑問に思うこと、分からないことは多職種がお互い容易に意見を出し合うことが可能で、相談しながら患者さんの診療を支援しています。チーム医療活動も活発に行われています。院内リスクマネジメントチーム、ICTチーム、NST・褥瘡対策チーム、糖尿病サポートチーム、骨粗鬆症対策チーム、緩和ケアチーム、認知症サポートチーム等に薬剤師として参加し患者さんの診療を支援しています。



臨床研究センター 治験管理部門

当部門では、より有効で安全な新薬の開発に欠かせない治験の推進に取り組んでいます。治験コーディネーター(CRC)として、患者さんへの同意説明の補助や併用薬・有害事象の確認、治験担当医師の業務支援や、院内関連部門との連絡・調整、治験依頼者（製薬企業）への対応など、治験が適正かつ円滑に実施できるようその活動は多岐にわたります。



CRCと治験薬開発の企業担当者が議論しているところ

医療安全推進部



医療安全推進部は、医療事故等の防止と医療の安全性の確保を目的に設置されました。医師、看護師、薬剤師、臨床工学技士等多職種で構成されており、薬剤師が1名、専従の医療安全管理者（ジェネラル・リスクマネージャー:GRM）として業務を行っています。業務内容として、インシデント、アクシデント報告を収集、分析し、医療事故防止に対する検討を行ったり、職員の安全への意識向上のため定期的に研修会を開催したり、院内巡回により医療安全の確認、調査、指導をしたりしています。このように、病院組織全体として医療安全の推進と医療安全文化の醸成・確立に取り組んでいます。



感染制御部

感染制御部には医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師等といった多職種が在籍しており、感染に関する様々な業務を行っています。昨今、抗菌薬の乱用がきっかけで、薬が効かない「薬剤耐性菌」の増加が問題となっています。薬剤師は抗菌薬適正使用支援チーム（AST）の一員として、感染症治療において、効果的な治療、副作用の防止、耐性菌出現のリスク軽減のため、抗菌薬の適正使用を支援しています。また感染制御チーム（ICT）の一員として、定期的に院内を巡回し、感染対策の実施状況の把握や指導を行っています（写真）。



このように多職種が連携しそれぞれの強みを生かして、病院内のすべての人々を感染から守り、患者さんが安心して治療に専念できる療養環境と職員が健康に働くことができる職場環境の提供を行っています。

メッセージ



藤原 大

就実大学卒業、岡山大学大学院修了
2010年4月入職

知識向上や専門資格の取得でスキルアップが図れます

私は入職4年目に緩和ケアチームに配属となり、チーム活動を通して緩和薬物療法認定薬剤師の資格を取得しました。その後、緩和ケアチーム活動と並行して病棟での患者指導業務に携わったのち、現在は調剤部門で新人教育と入院支援センターお薬相談窓口で入院予定の患者の常用薬確認業務を行っています。当院では多岐に渡る業務が経験でき、その中で自身の知識向上やスキルアップを図ることができます。また、大学院も新設されたことから研究活動にも取り組むことができる魅力的な環境にあると思います。

ライフステージにあわせて様々な働き方ができます

私は薬学部6年制の1期生として入職し、産前産後休暇、育児休業を取得後、育児短時間勤務の制度を利用し、現在、産婦人科病棟の専任薬剤師として働いています。妊婦・授乳婦さんの気持ちに寄り添いながら、産科・小児科医師、助産師等と協議し、正しい情報を提供出来るよう努めています。限られた時間の中でいかに効率よく仕事、家事、育児をこなすか試行錯誤の毎日ですが、家族や同僚の方々の支えがあり働き続けることができています。



大槻 真央

大阪大谷大学卒業
2012年4月入職



江川 英毅

大阪薬科大学卒業、2018年 臨床
研究センター入職、2021年～現職

実臨床と研究の両方の側面から患者さんへの薬学的アプローチを考える

私は入職6年目で、現在は化学療法部門で患者さんの薬学的問題点について考え、日々努力しています。化学療法部門では、外来患者さんへの抗がん剤説明・調製・院内スタッフからの問い合わせ対応を始め、多岐に渡る業務を行っています。また、当院では薬学部の先生と研究についての相談ができ、実際にがん化学療法における副作用因子解明のための研究等にも取り組んでおり、学術的な側面からも患者さんに貢献できるのも魅力のひとつだと思います。皆様と働くことを楽しみにしています。

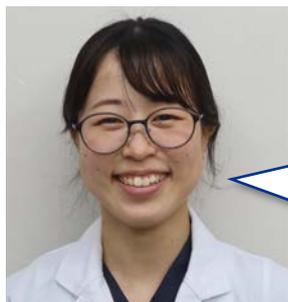
薬の専門家として患者さんにとっての最適な医療に貢献できます

私は入職後3年目で、現在は病棟業務に加え、ICTの業務も行っています。担当している整形外科・リハビリ科での手術目的の患者さんは高齢の方が多く、複数の常用薬を服用し、生理機能も低下しているため、薬剤変更の提案や相互作用のチェックの機会も多いです。薬剤師として責任は大きいですが、やりがいもあります。また、ICTとして病院環境や感染予防策の遵守状況の確認などを行い、改善のために指導を行うことで院内感染の防止にも取り組んでいます。患者さんが最適な医療を受けられるよう日々邁進しています。



坂口 雅弥

京都薬科大学卒業
2021年4月入職



森 絵里香

岐阜薬科大学卒業
2023年4月入職

薬剤師としての基礎を確立できる

入職1年目です。現在は調剤室での業務を中心に、無菌調製や抗がん剤調製、手術部での薬品管理等を行っています。調剤室では、内服、注射ともに幅広い疾患に対する処方に触れる機会があり、薬剤師としての基礎を身に着けることができていると感じています。また、薬についての問い合わせに応じたり、処方提案をすることも多く、薬剤師として頼りにされていると感じ、日々のやりがいに繋がっています。

採用情報

| | |
|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 業務内容 | 和歌山県立医科大学附属病院における薬剤師業務 |
| 応募資格 | 薬剤師免許を有する方、あるいは取得見込みの方 |
| 勤務場所 | 和歌山県立医科大学附属病院（和歌山市） （紀北分院（かつらぎ町）に勤務となる可能性もあり） |
| 勤務時間 | 交代制勤務（完全週休2日制、宿日直あり） 8:45～17:30、8:45～翌1:45、17:00～翌1:45 |
| 待遇等 | 基本給216,600円（大6卒で新卒の場合） 地域手当、通勤手当、住居手当、超過勤務手当等各種手当、期末勤勉手当（賞与）、退職手当制度、有給休暇制度、公立学校共済組合、雇用保険加入 ※令和4年度実績（待遇等については変更になることがあります） |
| 選考方法 | 書類選考後、選考通過者は筆記試験（語学、専門）および面接試験で採用の可否を決定します。 |

薬剤師の出身大学

大阪大学
金沢大学
京都大学
徳島大学
長崎大学
広島大学

大阪医科薬科大学
大阪大谷大学
岐阜薬科大学
京都薬科大学
近畿大学
神戸学院大学

神戸薬科大学
就実大学
摂南大学
同志社女子大学
徳島文理大学
日本大学

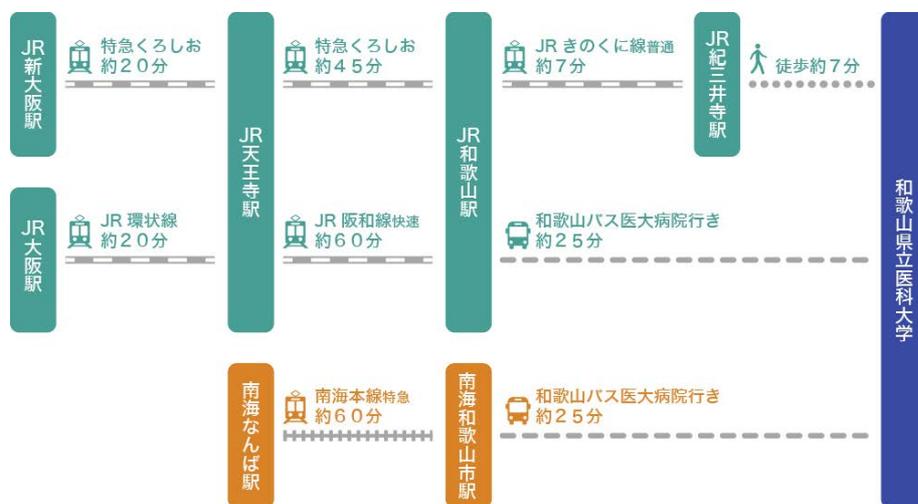
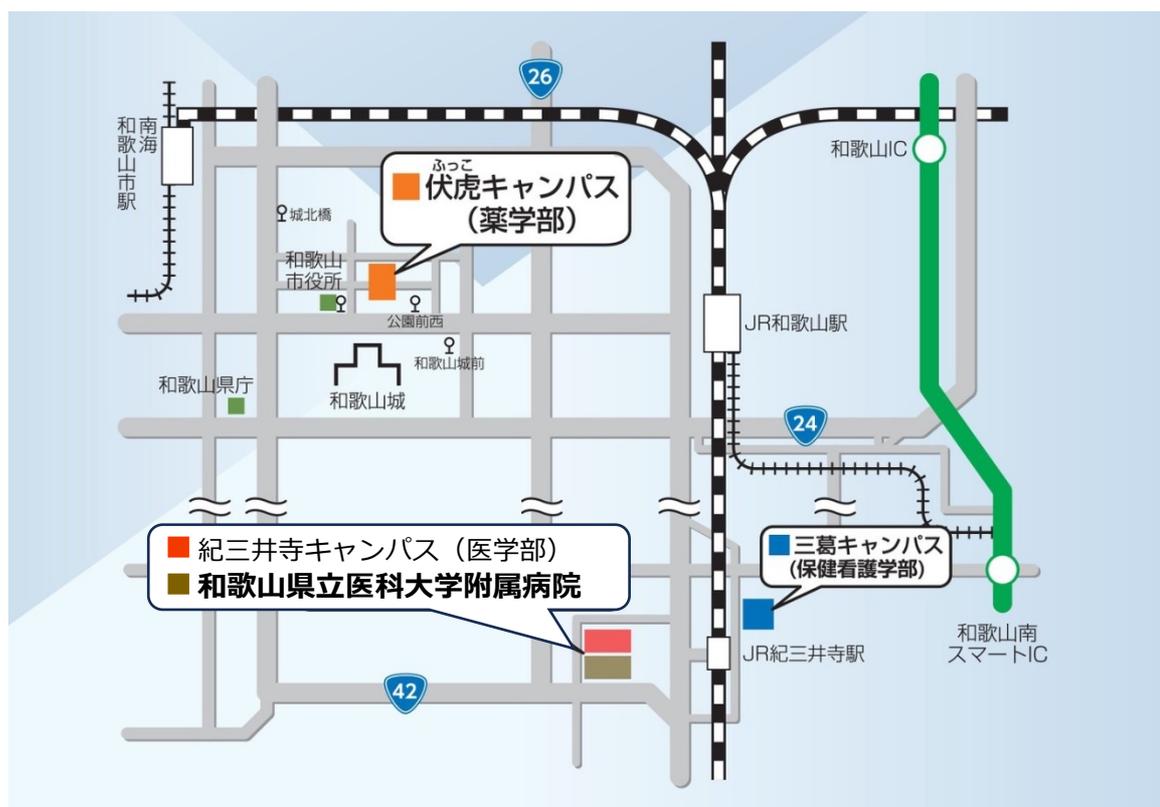
武庫川女子大学
名城大学
立命館大学

(五十音順)



入職1～2年目の若手薬剤師

アクセス



電車のご利用

JRきのくに線 紀三井寺駅下車 徒歩約7分

バスのご利用

JR和歌山駅または南海和歌山市駅から和歌山バス「医大病院」又は「医大病院前」下車「医大病院前」バス停は国道42号線沿いにあります。

JR和歌山駅から乗車の場合

- ・医大病院行き「医大病院」下車すぐ
- ・和歌山マリーナシティ・海南駅前・海南藤白浜行き「医大病院前」下車徒歩3分

南海和歌山市駅から乗車の場合

- ・医大病院行き「医大病院」下車すぐ
- ・和歌山マリーナシティ・海南駅前・海南藤白浜方面行き「医大病院前」下車徒歩3分



和歌山県立医科大学附属病院 薬剤部

Department of Pharmacy, Wakayama Medical University Hospital

〒641-8509 和歌山県和歌山市紀三井寺811-1

TEL : 073-447-2300 (代表)

E-mail : yakuzai@wakayama-med.ac.jp (代表)

公式ホームページ : <https://www.wakayama-med.ac.jp/med/yakuzai/>

インスタグラム : https://www.instagram.com/wmu_yakuzai/?hl=



公式ホームページ



インスタグラム